



信心

浄土真宗の教えの中で最も大事なことは、「信心(智慧)をいたたく」ということです。言わば、浄土真宗の「信心」とも言えるでしょう。私は「信心」という言葉はどうも「手垢(てあか)がついてしまっていて、「鯛(いわ)の頭も信心から」というようなイメージがついてしまっているの、あまり使いたくないなど思うのは正直なところです。です

から、信心という言葉を使わずに、「真心」と書いた方が誤解がなくイメージが伝わるのかなと思っています。

「真心(信心)」とは、「マコトノココロ」と親鸞聖人が読んでおられます。そして仏の教えとは、「自分の考え方」や「自分の生き方」を否定して行くので、「そんなこと言ったら世間じゃ生きていけないよ」などと反発してしまふのです。仏教を学んでいても、自分なりの人生観に固執(こじつ)し、「親鸞聖人はそう言うかもしれないけど私は」などと言う人などザラにいます。そして社会的に成功している人や自尊心の強い人ほど仏教を聴こうとはしません。なぜかと言えば、自分の方

が偉い、自分の方が苦勞している、自分の方がわかつてると思つてゐるからです。

私たちは自分の人生を生きています。その中で自分の思いを実現するために日々努力をおしみません。その後には、自分が認められたいという欲求が絶えず働いています。

ですから、地位・名誉・財産を求めて、社会から「善良である」と認められることを切に願つていきています。地位や名誉などいらないという人でも、人から必要とされたい、褒められたい、賞賛されたいと言えば心当たりがあるのではないのでしょうか？人を批判したり、説得したり、分からせたり、それも結局は「私」を理解させよ

うとする行為でしょう。もちろん表面上は「正しいこと」と自分で納得してゐます。自分を責めるのも同じことです。「自分は不幸だ！」ということが、相手を責めることであります。相手にむかう矛先を自分に向けているだけで、結局は「どうして私を理解しないのだ」と言つてるのでないでしょうか。

私たちは、人生を満足するために生きています。その満足感を得るために右往左往し、現実世界で満足できぬ人は、精神世界で満足を得ようとします。いわゆる「宗教に走る人」というものでしょう。それだけではなく、定年後のサラリーマンなどが、出世を見込めなくなつたので、仏教などを学び、自分の人生を

仏様に認めさせようとするなど、も往々にしてあることです。そういう「満足感」「自己肯定感」を求めることを、仏教では「執着しやくちやく」と言います。何もモノや人に執着するということではありません。結局はモノや人に執着するのは、「自分自身の心」に執着しているということです。価値観を作り出しているのは心だからです。

仏教は「無我」の教えです。つまり「私」というものを認めません。認めないというのは正確には違っていて、「私とよばれるものは存在しない」ということです。このあたりが通常生きていると考えないことなので難しいところですね。お釈迦様は「悩める心とい

うものがあるのなら、今ここに出して見せなさい」とおっしゃっています。心などというものはないので、よと言っているのです。仏教は自身を深く見つめ、自身の執着に気付くことだと私は思っています。言葉にしてしまえば単純なことなのですが、その自分の執着がなかなか見えない、というところなのです。

私たちの悩みの原因は、すべて執着にあるのですよとお釈迦様は教えてくださっているのです。浄土真宗では、この我執がしやくを「自力の心」と呼びます。そしてこの自力がひるがえることを「回心かいしん（えしん）」といいます。簡単に言えば、自身の執着に気付くことですね。

要するに「私は間違っていました」と頭が下がることが信心をいたたくといふことではないでしょうか。とは、言うものの、いつの間にか感情に執着する私に戻っているものです。しかし、一度気付かされれば、苦しみの原因を知るようになるので、そこより落ちることはないのです。信心をいたたくと常に我が身を「見つめる阿弥陀様の眼」を感じることが出来ます。「自身を見抜く眼」こそ仏様なのではないでしょうか。

仏に出遇^{であ}って始めて、私の「内実」に光が当たります。このことを親鸞聖人はありがたく思い、また大切にされたと思います。

九月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 九月七日(金)～十一日(火)

講師 鹿兒島教区東隅組 願成寺 藤 清道 師

○後期 九月十三日(木)～十六日(日)

講師 大阪教区西淀川組 養善寺 安德 剛典 師

○秋季彼岸会布教

九月二十一日(金)～二十三日(日)

講師 北海道教区空知北組 円満寺 金龍 之哉 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

○浄土真宗のみ教えについて布教使のご法話を頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院くださいますよう、お待ちしております。

○九月二十三日(日)は秋季彼岸会の御中日にあたりますので月忌参詣はお休みさせていただきます。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
 電話 (〇二三四) 二二一〇七四番
 FAX (〇二三四) 二九一四〇八番
 テレホン法話 二七一一六一番